＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第119号　毎月発行

発行 2022 年（令和 4 年）4 月 16 日　土曜日

2022年（令和4年）4月16日　土曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、68 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて４作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

あれから11年目の3月16日
再び東北に大地震発生！
大津波と火災と原発事故がなかったことは幸い

東北に再び大地震発生

当新聞の前号発行のまさにその当日―三月十六日夜に、あの東日本大震災の地震に匹敵する大きさの地震、福島県沖を震源地とするマグニチュード七・四の大地震が発生した。

福島県では前回に匹敵するどころか、さらに大きな揺れの規模だった場所もあった。

筆者の住む東京圏でも、あの大地震を彷彿とさせる規模だった。いつ終わるのか、永遠に続くのではないかと思わせる、前回と同規模の揺れだった。

このところ、震度四以上の地震が全国で発生しているところだったので、揺れには敏感になっていたが、それにしてもすごい揺れだった。

津波と火事と原発事故は発生しなかった

揺れがおさまりかけてすぐにテレビの速報を見た。津波が発生していないか、地震による大火災は起きていないか、そして付近の原発に事故は起きていないかをすぐに確認した。

速報レベルではどれも発生していなかった。大地震発生にもかかわらず、ほんとにほっとした。

あの大震災のときは、被災地の多くで、津波があらゆるものを押し流してゆく映像を何度も突き付けられ、地獄図絵のような地震による大火災がテレビ画面から流れ出ていた。

そして、ほどなく福島第一原発の冷却水装置が津波で壊れたために「水素爆発」が起きた。それで大規模な放射能漏れが起きた。

あの救いようのない地獄の光景が脳裏によみがえったが、幸いなことにそれらは起きなかったのだ。

今般、被災された方々には心からお見舞い申し上げるとともに、あの大震災を「再現」することなく、人的被害を最小限にとどめ、地震被害だけでおさめることが出来たことに心から敬意を表したいと思う。

東日本大震災の教訓が活かされた

あれからわずか十一年ともいえるし、もう十一年も経ったともいえるが、教訓はしっかりと継承されたと言えるのではないか。

地震や津波の発生は人力では如何ともしがたいが、大火災や原発事故は防止できる。

それらがまったく発生しなかったことは大いに称賛されるべきと思う。

一部地域では、水道管の破裂による断水が続いたようだが、関係者の尽力で、早急に回復した。

東北新幹線車両が脱線したが、幸いにも転覆は免れた。

新幹線の橋脚その他に千か所以上のトラブルが発生したようだが、地震発生からわずか一か月も経たない今月十四日に全線が開通した。

写真の新幹線の橋脚の破壊状況をみるにつけ、関係者の尽力には感謝したい。

東北自動車道も、地震発生直後に見た画像では、地盤の段差が出来て、アスファルトには多数の亀裂が入っていたが、無事修理を終えたようだ。これも関係者の尽力に感謝したい。

この交通大動脈の早期復活で、コロナ禍からようやく立ち上がろうとしていた東北観光業もほっとしたことであろう。

東北新幹線は全線開通前日から座席予約が殺到したことが良い兆しである。

その他にもたくさんの教訓が活かされた場面があったことだろうが、関係者に心より感謝申し上げたい。

早期復旧パワーは次に活きる・・・東北再興へ

こうしたインフラの早期回復により、食糧が不足することもなかった。日常生活に不可欠な品物も不足しなかった。通信インフラも大丈夫だった。

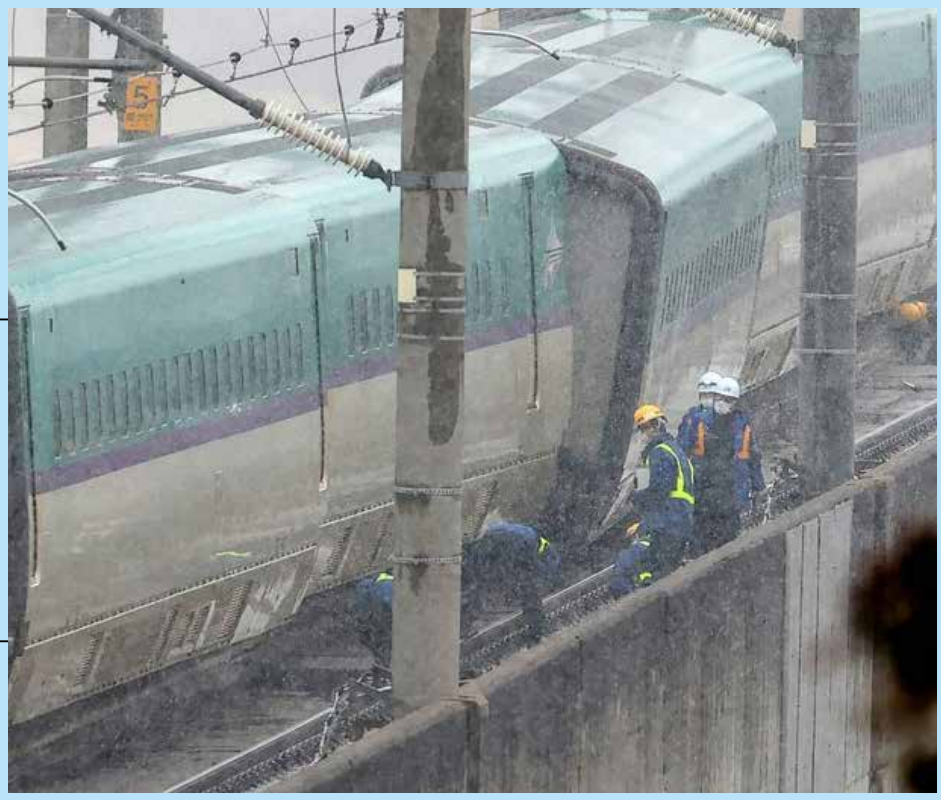
こうした生活維持に必要な最小限のもの、サービスが、滞ることなく継続させられることは教訓の最大のものではなかろうか。

「日頃、あたりまえのようにある日常が失われる」ことがどんなに大変なことであるかの教訓が、特に民間レベルでしっかり継承されていることが特筆すべきことではないだろうか。

こうしたことはやがて、東日本大震災で大きく傷ついた東北の再興にきっと役立つことと思う。

東北はもっと自信を持って良い。そうした潜在力を今般発揮したと言えると思うのだ。

そこで一息入れずに、そこから一挙に、東北再興のための新産業創出に突き進んでもらいたいと切に願う。



東北新幹線脱線・・・毎日新聞より

東北新幹線橋脚損傷・・・日経新聞より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

完全試合の佐々木朗希投手

【活躍する東北スポーツ選手】

最近、活躍が話題の東北出身スポーツ選手の一端をご紹介

最近、東北出身のスポーツ選手の活躍があちこちで目立つ。他の新聞では、活躍する東北出身のスポーツ選手だけを取り上げることはまずないと思われるので、「東北」を掲げる当新聞がその先鞭をつけようと思う。

佐々木朗希選手（野球）

まずは、プロ野球界からロッテの佐々木朗希選手。

今月十二日、日本プロ野球新記録の十三連続三振、ならびにプロ野球タイ記録の一試合十九奪三振、加えて完全試合との記録ずくめの成績達成。話題を呼ぶ。

このことは本場アメリカでも話題になっている模様。

また、素質は大谷より上とかと騒がれている。

岩手県陸前高田市出身、県立大船渡高校卒業。

今年 3 月の春場所優勝の若隆景関

高校時代から剛速球で一躍有名になっていたが、その後じっくり育成された。

東日本大震災の津波で、父と祖父母を亡くし、家も流され、大船渡に移り住む。このことはあまり話題に上らないが、そうした別れがあったことを感じさせない寡黙な東北人である。

関脇・若隆景関（大相撲）

三月春場所で新関脇として、実に双葉山以来の八十六年ぶりの優勝。

また、福島県出身の力士としても五十年ぶりの優勝。

福島県福島市出身。祖父も父も、そして三兄弟ともに大相撲力士という珍しい相撲一家に育つ。

小兵ながら、玄人好みの正攻法の相撲で寡黙な力士。

高安との優勝決定戦での粘り腰が印象に残る。

この優勝により福島県人を大いに勇気づけたことであろう。

大谷翔平選手

MVP大谷翔平選手の活躍ぶりは何度か取り上げているのでここでは省略する。

練習や野球研究の熱心さも図抜けているようだ。それはチームメートも驚くほどだという。

しかし、頑張るというよりも野球少年がそのまま大リーグでも活躍していると言った方がふさわしい選手。

今年はどんな活躍を見せてくれるか非常に楽しみである。

岩手県水沢市（現在の奥州市）に生まれる。

釜石シーウェイブス

当新聞でも応援している岩手県釜石市を本拠地とするラグビーチーム。かつては「新日鉄釜石」として何度も優勝した伝統あるチーム。

今年からスタートしたジャパンラグビー「リーグワン」の2部に所属。

近々開催される下部チームとの入れ替え戦に臨むことになりそうだが、とても心配である。

東北の学校に在籍した有名スポーツ選手

出身は東北ではないが、東北の学校に在籍していた経歴を持つ有名スポーツ選手は数多い。

昨年、ゴルフのマスターズで優勝した松山英樹選手は、愛媛県出身だが、大学はゴルフで有名な宮城県の東北福祉大学を卒業している。

同じくゴルフ界の有名人として宮里藍氏もいる。彼女は沖縄出身だが宮城県の東北高校を卒業している。高校在籍中にプロゴルファーとなり話題を呼んだ。

東北高校といえば、いま大リーグで活躍中のダルビッシュ有投手がいる。

筆者は、ダルビッシュ選手が甲子園で活躍する試合をテレビにかじりついて観戦していたが、当時から大物ぶりを感じさせる選手だった。

東北出身者、あるいは東北の学校出身者の活躍は喜ばしい。今後もますます活躍して欲しいものだ。

大谷翔平選手

ダルビッシュ投手

松山英樹選手

釜石シーウェイブス

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第92回

水産業再興のための料理レシピ紹介

《鰯のチーズパン粉焼き》

郷土料理愛好家
松本由美子氏

材料： イワシ３枚、パン粉、粉チーズ、刻み南蛮少々、南瓜　30g、レタス 15g、油　適量

料理方法：① イワシを開いたら、軽く塩・コショウをし、パン粉と粉チーズを混ぜたものと南蛮の刻みを混ぜます。 ② フライパンに少し多めの油をしいて両面を焼きます。蓋をして弱火にして火をとおします。 ③ 野菜と盛り合わせ、お皿にとります。

＊チーズが「ほどよいコク」を演出します（松本談）

コロナ禍による実に２年３か月ものブランクを経て、『第 44 回三陸酒海鮮会』を開催することとなりました。ほんとに長かったです！

日時・場所

日時：2022 年 4 月 23 日　16：00 ～ 19：00

場所：焚火家　東京都渋谷区　ヒカリエ近く

みなさんと久しぶりに再会できる喜びを十二分に堪能したいと思いますし、何よりも、うまい東北地酒と新鮮な三陸海鮮にもやっと再会できます。そして３・11 被災地への間接的な支援をいたします。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

改めて地震に対する備えについて

前号発行日に起きた地震

前回の記事の最後にこう書いた。「もし次の宮城県沖地震が前の地震から二〇年以内に来るのだとすると、あれから一一年経ってるのであと九年以内に起こるかもしれない、ということである。余震でM八という、とても余震などと言えないような規模の地震が起こるかもしれないということもある。風化などと言っている暇はない。一一年前のあの地震を既に終わった過去のことと捉えてはならず、またあの地震が遠ざかるほど、次の地震が近づいてきているものと考えて、ゆめゆめ油断してはならないのである」と。

前回の「東北再興」紙が発行された三月一六日のまさにその夜一一時三六分、福島県沖を震源とするM七・四の地震が発生した。宮城県白石市付近を走行していた東北新幹線の仙台行きの最終の新幹線は転覆は免れたものの脱線した。周辺の橋脚なども大きく損傷し、仙台と福島の間の復旧は四月一四日まで待たなくてはならなかった。実際、この周辺は、あの一一年前の東北地方太平洋沖地震での揺れを超える揺れを観測している。

文部科学省に設置されている地震調査研究推進本部の地震調査委員会は、この地震について、東北地方太平洋沖地震の余震域で発生した、としている。余震域内の一年あたりの地震の発生数は、依然として東北地方太平洋沖地震前より多い状態が続いていて、現状程度の地震活動は当分の間続くと考えられるとのことである。事実、この余震域とされる海底では、昨年二月一三日にも福島県沖でM七・三の地震が、翌月三月二〇日には宮城県沖でM六・九の地震、五月一日にもM六・八の地震が発生している。

いまだ備えなければならない余震

「仙台防災未来フォーラム」での東北大学災害科学国際研究所の東日本大震災メモリアルシンポジウム「海溝型地震研究の発展と将来への備え」の中の松澤暢氏の基調講演での要点を再度紹介してみる。

・余震活動は継続しており数十年に亘って続く可能性がある。その中ではまだ起きていない最大M八クラスの余震が起こってもおかしくない。

・今回の震源域に隣接する北、東、南の領域で今後大きな地震が起こる可能性がある。

・次の宮城県沖地震の発生が早まり、前の地震から二〇年以内に起こる確率が六〇パーセントというシミュレーション結果もある。

・震災後始まった東北の太平洋沿岸地域の隆起は今後少なくても一〇〇年は続くと見ている。

・東北北部と北海道には概ね四〇〇年に一度巨大な津波が押し寄せた証拠がある。前回から既に380年が経過しており、差し迫った危機。

まさにその通り、いまだ終わらない余震が昨年、今年と続いていることを、これらの地震は如実に示している。しかも、である。これらよりもさらに強い地震が起こる可能性すらあるのである。

最大余震は概ね、本震のMより1少ない規模だとされる。実際、東北地方太平洋沖地震よりも大きなM九・一を記録した二〇〇四年のインドネシアのスマトラ島沖地震では、翌二〇〇五年、二〇〇七年、二〇一二年にM八クラスの巨大地震を相次いで観測している。東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震のM（マグニチュード）もM九なので、最大の余震はM八クラスということになる。M九の本震より一少ないと言っても、M八は間違いなく巨大地震である。

地震の規模を示すMは、〇・一上がるとそのエネルギーは約一・四倍になる。〇・二上がると約二倍である。ということは、M八クラスの余震は、今回の地震よりも八倍もの規模の地震ということになる。余震という言葉でイメージされるような弱い地震では決してないどころか、他に類を見ない大きな地震であることが分かる。しかも、それがスマトラ島沖地震とは違って、東北地方沿岸ではまだ起きていないのである。余震活動が今後数十年に亘って続く可能性があるということは、このいまだ起きていない巨大地震に対する備えを、当然十分すぎるくらいに行っておく必要があるということである。

発生が確実視される超巨大地震

加えて、別の地震に対する備えも必要である。とりわけ要注意なのが、上記にも挙げられている東北北部と北海道の地震である。東北地方太平洋沖地震は日本海溝沿いで発生した超巨大地震だが、その北の岩手県沖以北の日本海溝沿いの地震と、北海道の千島海溝沿いの地震が警戒されている。このうち、千島海溝沿いの超巨大地震は、予想される地震の規模はM八・八以上とされ、平均発生間隔は三四〇～三八〇年、前回発生したのは一七世紀で、そこから既に平均発生間隔と同等の時間が経過している。先述の地震調査委員会の算出した地震発生確率は、一〇年以内が二から一〇パーセント、三〇年以内が七から四〇パーセント、五〇年以内だと一〇から六〇パーセントとなっている。近い将来、起こることが確実視されている地震なのである。

この日本海溝北部の地震と千島海溝沿いの地震については、内閣府の中央防災会議の防災対策実行会議の下に設けられた「日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震対策検討ワーキンググループ」が震度分布や津波高などを推計している。それによると、それぞれ東北地方太平洋沖地震と同等の最大クラスのM九クラスの地震が発生した場合、日本海溝沿いの地震では岩手県宮古市に約三〇メートル、千島海溝沿いの地震では北海道えりも町沿岸で約二八メートルの高さの津波が押し寄せる、とされている。人的被害は、日本海溝沿いの地震で死者が約六千から一九九千人、千島海溝沿いの地震で約二二千人から一〇〇千人となっている。

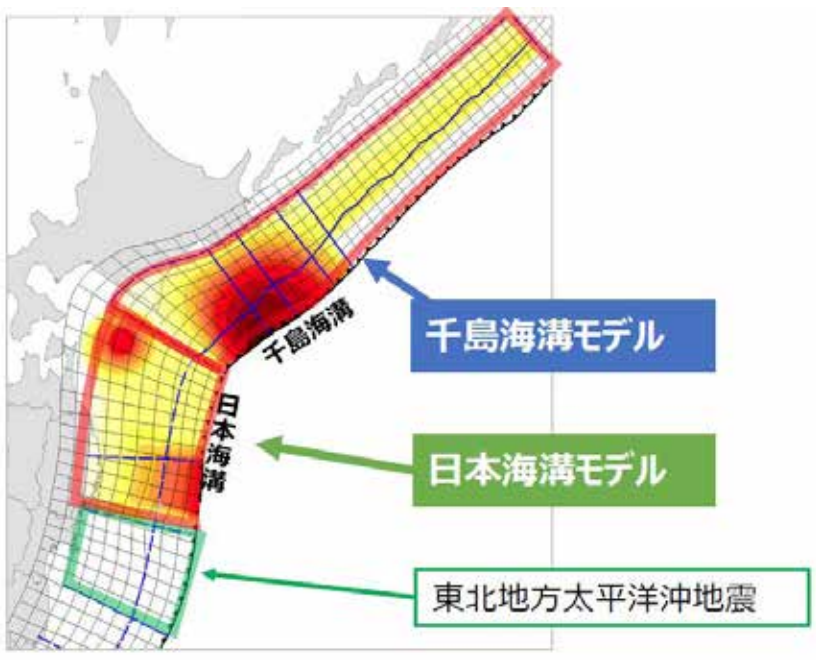
最小と最大でかなり幅があるのは、地震が発生する季節や時間帯などによって、被害に大きく差が出ると予測されるためである。特に、冬季の場合、屋根に積もった雪の重みによって全壊する家屋が増えて死者が増える、積雪のために避難に時間がかかることで津波に巻き込まれる死者が増える、避難しても長時間屋外の寒さにさらされるために死者が増えるということが見込まれる。東北地方太平洋沖地震は午後の早い時間帯に発生したが、地震が深夜に発生した場合にも避難までに時間が掛かり、それによってやはり津波に巻き込まれる死者が増えると想定されるのである。

国任せにせず一人ひとりで対策を

ただし、同ワーキンググループによれば、適切な対策を講じればこうした被害を減少させることができ、どちらの地震でも死者を約八割減らすことが可能だとしている。具体的には、①津波からの人命の確保、②各般にわたる甚大な被害への対応、③広域にわたる被害への対応、④対策を推進するための事項、に分けて対策を提言している。それによれば、①については避難路・避難施設等の整備、避難時における防寒対策、防災教育・防災訓練の充実、要配慮者への支援、集団移転等の検討、②については建物の耐震化、出火・延焼防止対策、ライフライン・インフラ施設の耐震化等、③については広域的な支援体制の構築、救助・物資運搬等の人員・装備・備蓄の確保、事業継続計画（BCP）の策定・充実、④については防災意識の高い地域社会の構築、後発地震発生の注意を促す情報発信と地震への備えの再確認、科学的知見の蓄積とデジタル技術の活用、を挙げている。

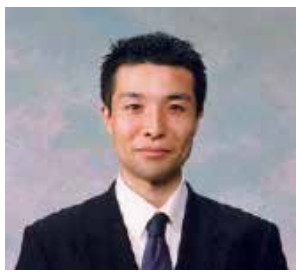
これらの対策については、自治体や地域全体で取り組まなければならないものも数多いが、一方で一人ひとりが進めていくべきものもある。まず、夜間や寒冷時に避難しなければならないことを想定した避難用持ち出し袋の準備で、その中には当然懐中電灯や防寒用のアルミブランケットなども入っていなければいけない。低体温症に対する知識も身に付けておく必要がある。家屋の耐震化も個人で対応しなければならない。家の中では家具の固定、電気に関する火災の発生を防ぐ感電ブレーカーの設置も必要である。高い津波が来ても大丈夫な避難場所、そこまでの避難ルートの特定、特に避難ルート上に地震発生に伴って危険が発生することがないかどうかの見極めなど、検討すべき項目は数多い。非常時に家族等と連絡が取れる手段はあるか、災害用伝言ダイヤル、伝言板サービスなどは使えるか、スマホが情報収集、連絡手段の核になるだろうが、電源の確保をどうするかも大きな課題である。何より、海に近い場所にいる場合、地震が発生して津波の危険があれば直ちに避難するという意識をしっかり持つこと、土砂災害や地盤災害、液状化など、津波以外に想定されるリスクがないか検討すること、その上で必要なことについては隣近所と共有しておくことも大切である。

やるべきことは数多いが、近い将来間違いなく来ると分かっている地震に対して、国や自治体任せにすることなく、一人ひとりが当事者意識を持ってできる対策を講じていくことが結局のところ、いざという時の被害を最小限にする原動力となると思うのである。



執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

失われし歴史の闇の城楼に重ね観た東北男女の未来の事

日頃、長引く感染症の流行傾向により閉じこもっていた仙台市から少し脱出する意味も込めて、先日ただ蕎麦を食べに行く、という名目で「山越え鉄道」仙山線を使って隣県であり隣町でもある山形県山形市への小旅行を決行した。もともと山形県人でありながら、実は私は県内陸を歩いた経験は少なく、この土地の事はよく知らない。近年まで日本海側からは交通の便もよくなく、多くの庄内人にとって内陸山形県は未知の世界だったのである。

さて、山形市近辺には庄内にはない蕎麦文化があって、「冷たい鶏そば」とともに仙台でも近年よく知られるようになった「いか下足天」を添えた盛り蕎麦が素晴らしく、本当に食べる為だけに山越えしてくる価値があるなと確信したのであったが、店を出て歩いていると不意にその日想定していなかった事を思い起こした。実は、蕎麦屋のある山形大学近辺からJR山形駅へ戻る途中にかつて仙台「常盤丁」とともに東北における二大遊廓街と呼ばれた「小姓町」が町名そのままにそこにあったのである。

小姓町は仙台常盤丁に近い規模を持ち、仙台では昭和三十三年の売春防止法施行後は町の名前を変えたのみならず、遊廓街とはセットとも言われる稲荷神社までも撤去したのに対して、ここでは町名も稲荷社もそのままに残しており、土地柄の違いを感じていた。のみならず、小姓町には娼妓たちの性病検査の為の病院であった「駆梅院」の建物が残されている事を、私は仙台の遊廓街について取材した千葉由香の記事で知ったのである(『別冊東北学』で連載、のち『仙台小田原遊廓随想録』(荒蝦夷出版)にまとめられた)。それは麺類などの食品衛生関連の施設として再利用されている、何と明治時代に建てられた簡素な美しさを持つ洋風建築であったが、今回この町を一巡してみても写真で見覚えのある建物が目に入らず、スマホの地図にて件の「山形県生活衛生会館」の位置を探し当てると、果たしてそこは何も建つ物なき広い更地となっていたのである—調べると、平成三十年三月に既に解体。岩手県と並び、旧きものを保存する事にかけては期待に違わぬ山形県、と手前味噌のように勝手に思い込んでいたが、当の山形県人が長い間忘れているのでは、いつしか幻のように消え去ってしまっても無理からぬ事であった。

＊

そもそも私が遊廓について興味を持った始まりは十年以上前に前述の千葉氏の連載にて、取材されていた仙台市小田原の旧常盤丁（一時期、旅籠町）が私が東京から仙台へ移住するまでの環境の「下調べ」の為の常宿にしていた場所である事実を知った事にあった。

小田原の町で常宿にしていた旅館はユースホステル提携もしていた事から貧乏旅を続ける者として縁があった訳だが、後から考えればそれは紛れもなく純和式にしてどこか個性的な、つまり改築を重ねながらも遊廓妓楼の面影を残した貴重な建築物なのであった。

常盤丁こと仙台小田原遊廓は伊達藩三代・綱宗の時代に起きた伊達騒動の因となったという藩主の遊廓通いの戒めとして（近年は綱宗への濡れ衣説が有力）江戸期を通じ遊廓を置かなかった仙台に、明治となって塩竈など近辺から移転してきた妓楼・娼妓によって形成され、二度の移転を経て当地へ定着した。敷地は東京・新吉原の三割程の規模を持ち、廃止後は多くの遊廓街と同様旅館街となるが、最終的に前述の旅館のみを残し全て解体される（ただし、例の旅館は千葉氏の連載で掲載された常盤丁当時の地図では「不明」とされた位置にあり、連載中取材も一切受けていない事から妓楼だったか否かは不明）。

この、遊廓関連の遺構を残す残さない云々の話は、よく大阪や名古屋など西日本と東京や仙台など東日本の比較材料としてよく話題に登るものである。例えば名古屋にはかつて中村遊廓という仙台の数倍の規模を持つ遊廓街があったが、これだけの大都市の中で築百年以上経つ遊廓遺構が実に驚嘆する程によく残されている。この他大阪には飛田新地と呼ばれる、かつての遊廓街の建物や風情を残した風俗街が現存し、奈良や滋賀にも当時の建築が残されている様をネット上でも確認する事ができる。

しかしこの事で西日本の風土をうらやみ、東北は遊廓を歴史遺産の一環として捉えられず文化が残らない、と嘆く事は妥当なのか？

東北の街から遊廓の痕跡をことごとく無かった事にするかのような流れは、特に仙台においては二百年以上退けられてきた遊廓を、戊辰戦争敗戦後に敵軍の兵らを相手とする為、新政府の要請を受けて置くようになった事、そしてそこには敗戦によって没落した藩の武家の女性らも身を落ざるを得なかったという屈辱的な側面があった事が大きな要因ではないかと思われる。そして何より、東北全体においては江戸・明治・大正、そして昭和期を通じて飢饉などによる貧困と娘らの遊廓への「身売り」が分かち難く関連し続けてきた現実があったのである。

遊廓に労働する以前の「遊女」という概念そのものは歴史が大変古く、「人類史最古の職業」と呼ぶ向きさえある事はよく知られているが、日本においては古代に巫女として神に仕え芸能にも長じた女たちが傀儡女や白拍子と呼ばれる漂泊の遊女となり、中世・近世を通じ時の政府によって徐々に取り締まられる存在となっていった経緯がある。

遊女が必ずしも「売られてきた」不幸や悲壮感を伴なった者ばかりではなかった事実はあるものの、明治期には外交上、近代国家形成の過程からも問題があるとして社会の暗部・恥部であるとの世論誘導が為され、完全に「闇の女たち」という烙印を押された存在となってゆく。

ここで後に遊廓遺構を残す西南日本、消し去ってしまう東北日本の違いを生む事になる要因は何であったかを考えると、遊女・遊廓の歴史として残り、語られる地域が江戸・大阪・京都あるいは長崎など関東以西での出来事である場合が多いという点が決して小さくないと思われる。遊女の歴史が始めから闇であり、恥であるのではない、別の側面が語り継がれる事で、その存在への反感・排斥意識と相反するような親近感が、民間に広く醸し出されていったのではないだろうか。

そして、地域住民の気質の違いがある。私は仕事柄、名古屋や大阪、九州方面の人々と日々対話する機会があるが、自分たち東北人との違い、例えば名古屋人の感情の起伏の激しさ、時に無遠慮で悪くすれば無思慮にも思える対応に驚かされる。かつて三人の歴代「天下人」を輩出した土地柄ならではの、いたずらに軋轢（良くいえばドラマ）を生む性格の中に、東北より遥かに軽々と「性」に向き合う気風、性風俗に対する全国的な風評・偏見・中傷何するものぞという気概のようなものを感じてしまうのである。同じ日本人とは言うが、やはり英国内のケルトやサクソンのように、言葉が通じるだけの「別の民族」なのかも知れない、という感慨も、あながち的外れではない気がするのだ。

ところで実は一軒、この東北にも全国的に有名な、途方もない貴重な遊廓建築が現存している。八戸市の「新むつ旅館」は八戸小中野遊廓に「新陸奥楼」として創業した築百年の歴史と当時そのままの威容を誇る妓楼建築である。

当館は長年高齢の女将が一人で切り盛りし、その人柄をも愛した旅人らが全国から集まっていた。東京下町出身の江戸っ子で、旅館転業後の当館へ嫁ぐまで、元遊廓である事実を知らなかったと言うが、彼女はこの建物を愛し、遊廓時代の遺物や記録をことごとく残すという全国的にも珍しい博物館的旅館へと育て上げた。しかし昨年十二月、女将は逝去され旅館は令和四年四月現在休業中である。

仙台の元・常盤丁に建つ唯一軒の旅館も、令和二年五月に営業終了し、建物は当面残すとして今に至っているが、今後どうなるかは何とも言えない状況である。

＊

「新むつ旅館」の女将は何故遊廓建築をそこまで深く愛したのだろうか？

東京の元・遊廓街である吉原に平成二十八年創業の遊廓専門書店・カストリ書房を訪れる客層は開店当初から二十～三十代の若い女性であると言う。

何故いま、既に歴史の闇に沈んだ遊廓に、関心が向けられているのか。一般には不況から来る性労働を視野に入れた職業観の変化、そしてその現実の中にもロマンを求める異世界や大正レトロ的なものへの憧れなどがあると言われる。私はもう少し踏み込んで、結婚や恋愛という男女関係の形において混沌化し、行き詰まりを見せる現代社会の中で、時代の重圧と様々な制約の果てにとどめを刺され、昨今の風俗業の形に押し込められる以前の原初的な遊廓、あるいはそれ以前の遊女の姿に憧憬の目が注がれているのではないか、との仮説を立ててみたい。

近年少子化・非婚化が急速に進行する中、個人間・社会間で「婚活」やネット上での様々な「出会い系サイト」が展開されているが、男性は地位・学歴・年収など、女性は年齢などの条件に当てはめようとするその仕組みに抵抗感を示し、性格的にも積極的になれないなど必ず枠から零れ落ちてしまう層が存在するという。

遊廓とは現在のところ、暗部という現実を差し置いて男女が（金銭以外の）条件抜きで、しかも非日常的空間で直接出会う事ができる空間（しかも現行の性風俗店とはかけ離れた場所）として、抗い難い魅力を発信しているという事なのかも知れない。

ならば西日本とは違う、遊廓の暗部に敏感な東北の気質において、これを実際に改善して言ってみれば金銭も性行為も前提としない、もっと多様で自由な、男女始めとする人々の出会いの場が、作りだせないものか—遊廓建築を残して愛し、旅客を迎え続ける心にはそんな果てしない夢や希望が秘められていたような気がするのである。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

惜しまれつつ閉館した仙台・元常盤丁の旅館（二階が前に張り出した独特の構造）

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

キクザキイチゲ

ＳＬ銀河試運転足ヶ瀬駅出発

ユキワリソウ

残雪とフクジュソウ

シリーズ
遠野の自然

「遠野の清明」

遠野 1000 景より

三社神社

早池峰山２

なかなか春が来ないと、寒がりの筆者が嘆いたところ、今度は、春を通り越して一挙に夏日を迎えている。

心身ともに寒さに身構えていたのに、急に二十五度を超える夏になるという急激な変化に身体がついていけず、体調がすぐれない。

季節の変わり目に発生する「寒暖差アレルギー」という病気もあるようだが、筆者はそれに加えて花粉症もあり、さらに老化もあって、複雑な症状を呈している。

本来の春に安定するまで落ち着いて待つとしよう。

遠野の植物や動物たちは季節の変化に合わせ、行動を変える。花は咲きはじめ、渡り鳥は北を目指す。大きなエネルギーの変動である。

仙人峠で出合ったキツネ

白鳥とＳＬ銀河試運転

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

シリーズ　【東北再興のための新産業創出】　第１回

企業誘致はもう古い。世界の激変に対応する東北独自の新産業を創出する必要がある。災害が多いと嘆くのではなく活用する方法もある

新シリーズ【東北再興のための新産業創出】開始

前号で、世界を巻き込んでいる「ウクライナ問題」を端緒に、日本にある三十三基の原発と原子力関連施設が、近未来に出現が想定される可能性のある敵国の攻撃目標になりうることを述べ、もし攻撃されたら、福島第一原発の「水素爆発」どころではない甚大な被害をもたらすこと、したがって、現在休止中の国内原発の再稼働をあきらめ、代わりの電力生産システムを早々に立上げ、あるいは再生可能エネルギーに切り替えることなどを提案した。

そうした前号の提案を引き受ける形で、しかも、電力問題だけでなく、産業分野の範囲を拡大して、【東北再興のための新産業創出】というテーマで今回号から、新シリーズをスタートする。

取り上げる産業分野

取り上げる産業分野は広くなるため、事前にその概要を示す方が分かりやすいと思われるので、現段階で取り上げる予定の産業分野を以下に示す。

①「新防災産業」

この分野は、自然災害が多発する東北ならではの分野である。

地震、津波、水害、火山噴火等の自然災害に関連する産業分野である。

それぞれの自然災害に個別に対応する姿勢から、すべての災害対策を取りまとめた総合対策へと発展させていくことが求められていると考える。

②「新エネルギー開発」

これは前号のテーマを深掘りして、さらに具体的な産業論にまとめていくものである。電力生産、その他のエネルギー開発関連産業である。

特に、日本のロシアへの経済制裁への反発から、ロシア産の天然ガスの輸入は従来通りとはいかないであろう。対策は急務である。

③「新防衛産業」

今般の「ウクライナ問題」を契機に、日本の防衛体制に注目が集まるはずであるが、さらに今月十四日のロシアによる日本海ミサイル打ち上げでより現実化してきていると考える。北海道に隣接する北方四島でもロシアの軍事訓練が行われ、北海道を威嚇しているので、北海道と連携していくことも考えられる。

④「食糧安保関連産業」

日本のロシアへの経済制裁への反発で、日本周辺のサケマス漁は従来のような漁獲が望めそうにない。それ以外にもロシアに依存する水産資源は多い。それらの資源調達が一挙に縮小する危険性が現実のものとなっている。

また、水産資源だけではない。小麦なども、ロシアからの輸入は大きく減少するであろう。これらの対策は急務である。

⑤「新通信システム」

「ウクライナ問題」から日本が学ぶことはたくさんあるが、なかでも非常時における通信網の確保はいざというときには非常に重要な意味を持つことを学んだ。非常時での国と国民の一体化には不可欠のインフラであることを学んだ。この通信網を確保することで、非常時にも「孤立」することがなくなる。それがいかに大事かは「ウクライナ問題」が示すところである。そうした非常時でも機能する通信インフラ開発である。

⑥「人口増大関連産業」

こうした新産業を支える基本的な基盤として、労働力確保問題がある。

労働力のないところに、産業は誕生しない。

このテーマも緊急性を要するので、短期間で効果を挙げられる新産業と捉えるべきである。

以上を当面の分野として掲げる。

思わぬところからの新産業創出の必要性

突然出現した「ウクライナ問題」を契機として、東北はもちろん、日本全体が、エネルギー問題や食糧問題に直面することになる。

これまでは起きるはずもないと思っていたことが現実に起きたのだ。

だから、それを嘆いてばかりはいられない。

いち早く、東北が率先して新産業創出に取り組んで欲しいと願う。

「民主導」による新産業創出

これだけの大事業だから、国と一体となって推進すべきだという考え方は最初から捨てることだ。東日本大震災からの復興作業で十分に懲りたではないか。

復興は遅々として進まず、被災地や被災者のためになった部分は少なく、ゼネコン等が潤うことを優先した施策であったことは明白だ。したがって、「産官学」ではなく、「産学」で対応すればよい。

特に緊急性を要する事業に「のんびり官僚機構」は役立たないと断言してもよい。

平和時に許される「のんびり対応」では間に合わない。

資金も民間が引き入れればよい。いまの時代には多種多様な資金調達手段がある。さらに事業形態も多種多様であってよいのだ。

世界を俯瞰する新産業

この事業推進では、いつまでも「日本の東北」などといっている場合ではない。

「激動の世界の中の東北」であることを意識しなければ新産業創出など望むべくもない。

常に世界の情勢にアンテナを張り巡らせて、新産業を創出し、かつ運営して行かなければならない。

東北のグローバル展開など、世界からしたらめずらしいことでも、新規性があるわけでもない。すっかり遅れてしまっていることに早く気付くべきである。

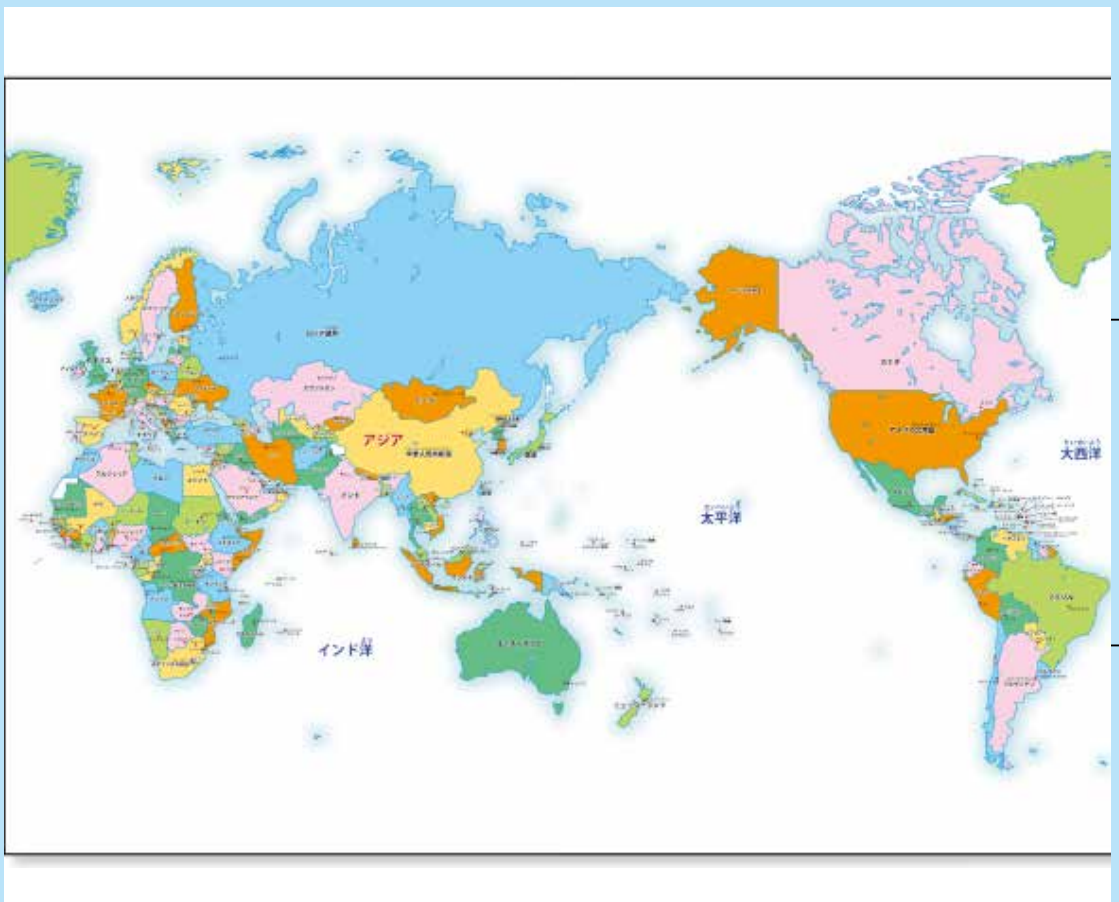
新たな東北像を創出

最後に、こうした新産業創出は無理だとあきらめる前に、もしも出来たらどのような東北像になるのかを思い描いてみることだ。

当新聞は従前より訴えていることだが、東北には巨大な潜在力が眠っている。

それを掘り起こせばいいのである。

将来が楽しみである。



世界地図

東北地図

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする
東北の風景

【春の鹿（しし）】

写真撮影　尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.